



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Imagining Japan in Moscow and Sakhalin, and Imagining Russia in Tokyo and Hokkaido : Contrasting identities and images of Other in the center and periphery. [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	BUNTILOV, GEORGY
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13626号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74653
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Georgy_Buntilov_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：BUNTILOV GEORGY

審査委員 主査 准教授 ゲーマン・ジェフリー・ジョセフ
副査 教授 池田 恵子
副査 教授 ウルフ・デビッド（スラブ・ユーラシア研究センター）
副査 助 教 パイチャゼ・スヴェトラナ（メディア・コミュニケーション研究院）
副査 教授 シートン・フィリップ（東京外国語大学国際日本学研究院）

学位論文題名

Imagining Japan in Moscow and Sakhalin, and Imagining Russia in Tokyo and Hokkaido: Contrasting identities and images of Other in the center and periphery.

（モスクワ及びサハリンから見た日本と東京及び北海道から見たロシア： 中心と周辺地域における「他者」に対する日本及びロシアのアイデンティティとイメージの対比）

本論文は日本とロシアにおける中心および周縁から発信された報道の Content analysis（内容分析）によるもので、日本とロシアのイメージを議論する新聞記事を比較分析の対象とし、両地域の新聞記事における「自国」と「他国」のイメージ、ロシアと日本におけるナショナル・アイデンティティについて比較検討がなされていたものである。具体的には、首都からみれば周縁に位置するが、地理的に接している北海道とサハリンのメディアの観点、北海道およびサハリンから遠く離れているが、中心に位置する首都モスクワと東京のメディアの観点がどのように異なるのか、両国の中心と周縁からみた報道の相違を明らかにすることが目的とされている。2000年から2010年にかけて、日露関係の主要な出来事（首脳会談など）の前後、それらに関連する新聞記事のデータベースを作成し、膨大なデータに基づき、量的分析と質的分析を駆使し、メディアの主たる報道方法、論点、取り扱うテーマが明らかにされている。

このようなメディア分析に加え、現象学的な概念「自」（Self）と「他」（Other）に基づくアイデンティティモデルと E. Laclau のいう「アンタゴニズム」概念に依拠し、国境をへだてた両国の中心および周縁における「他国」のイメージとナショナル・アイデンティティについても分析がなされている。すなわち、ロシアと日本との関係（国家レベルの対比）、モスクワとサハリンあるいは東京と北海道の関係（中心／周縁の対比）、サハリンと北海道の関係（隣接する地域レベルの対比）について、アンタゴニズム概念を用いた日ロ関係およびアイデンティティの対比が提示されている。本論文において、「アンタゴニズム」は必ずしも対立を意味するわけではなく、緊張やある種の不安定、曖昧さを含み持つとした Contingent Antagonism の概念が重視されている。そして、他国に対するアンタゴニズムとは、自国が独自のアイデンティティを構築することで立ち現れると主張されている。

上述の現象学的な論点は、2016年に *Asian Philosophy* 誌に掲載され、評価を得ている。また、中心と周縁という横軸の対立軸と自己と他者という縦軸の二分法を組み合わせることで、操作概念上、4つの方向性を有する次元が想定されることになり（すなわち、Self-National / Self-Peripheral / Other-National / Other-Peripheral）、こうした多角的なパースペクティブは各章で論じられる個々のケーススタディからなる「記憶の歴史」として描き出されている。こうした手法は従来の2分法的な比較史研究を超える方法論を提示するとともに、トランスナショナルな歴史学を切り開く可能性があるとして評価できる。

第2章では、政府機関と非政府機関が実施したロシアと日本の市民の交流について論じられ、各種の交流を公的（国、県、自治体の間）、政府と民間組織の間、団体（NPO、企業の間）と個人に分け、G8サミット、姉妹都市関係、企業の関係、漁業とエネルギー政策などに関する報道が分析されている。

第3章は、北方領土問題と北方領土に関する交流の報道についてである。全国的なメディアは北方領土問題を外交問題として扱う傾向があるが、これに対し北海道のメディアは同問題の日常生活に対する影響に関する報道を多く含んでいると指摘されている。サハリンのメディアでは、交流を歓迎する市民の意見は報道されているが、領土問題に関する興味や領土を「譲渡する」意思に関わる記事はほぼ見られないという結果も提示された。

第4章は、日ロ関係の歴史と軍事史に注目し、対象とされた時期を5つに分け、19世紀以前、日露戦争、第二次世界大戦、樺太の記憶、捕虜・抑留者の体験に関する報道について論じている。特に北海道におけるメディアは、歴史を物語として報道する傾向があり、樺太時代のノスタルジーが特徴的に表れている。両国ともに、ナショナルレベルでは歴史に関する報道に政治的な脚色があり、自国の置かれた立場、すなわち、勝者か敗者か、加害者か被害者かという認識によって報道が左右されることも指摘されている。

第5章では、新聞におけるロシア人のイメージとロシアの新聞における日本人のイメージについて論じられている。データ分析を通じ、他者をめぐるステレオタイプが浮き彫りにされている。日本は技術の国、日本人は勤勉であるというイメージに対し、ロシア人に関する報道では、全国紙の場合、犯罪に関する記事が多いが、北海道ではロシアとの交流に関する記事が多くなっており、全国レベルの記事と地域の報道との間には記事の傾向に差異がみられた。

以上の骨子からなる本論文は、画期的な発見を提示したわけではないが、膨大なデータ分析、近年注目される歴史学の方法論である「記憶の歴史」に依拠し、さきに述べた2分法を凌駕する分析方法を用いて、正確な読み解きに基づく概念研究に依拠した論述である点に信頼がある。審査委員会は、丹念に分析され、論拠が明白であったという見解で一致した。また、ロシア語、日本語、英語という三つの言語を駆使し、分析と論述がなされていることや、新たな地域比較研究としての価値も評価できるものがあり、このことは本論文の一部が *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies* (*ejcjs*) に掲載されたという事実からも裏づけられている。本研究は今後、専門書として公刊され、日露関係の文献に新たな貢献をなすものとして期待される。

よって、著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。